

I 事業の概要（地域の実情含む）

本校の生徒は、釜石市、大槌町、遠野市の3市町から通学している。令和元年度の生徒数は27名である。生徒の約6割が東日本大震災の際に、家屋全壊等の被害を受けている。

震災後8年目を迎え、三陸沿岸道開通などの復興事業が進む中、震災で被害に遭った家庭も復興住宅等に転居するなどし、現在、仮設住宅から通学する生徒はいない状況である。復興と共に8年という歳月を経て震災の記憶の風化が進みつつある現状からも計画的かつ効果的な防災教育が必要となっている。また、卒業後も地域に残り就労する生徒がほとんどであるという実情からも、被災地で生き、郷土を支える人材の育成が望まれる。

このような背景を踏まえて、直面する災害に対して的確に判断し行動選択ができることを目標とした防災教育、また、自然や郷土の産業と触れる体験学習を実施し、豊かな心を育むことを目標とした学校独自の復興教育を推進する。

II 取組の概要

1 ホースセラピー

5月30日（木）、釜石市橋野町にある三陸駒舎でホースセラピーを実施した。馬の餌やり、手入れ（ブラッシング）、乗馬などの体験をした。また敷地内の草取りも行い、命とかかわり、郷土の美しい自然に触れる機会となった。

【参加人数：生徒21名、教職員6名】



「ホースセラピー」乗馬体験

2 避難訓練

6月24日（月）は地震を想定した避難訓練、10月23日（水）には火災を想定した避難訓練を実施した。全日制・定時制・釜石祥雲支援学校・祥雲支援学校合同の避難訓練で、第2回の避難訓練では停電により放送機器が使用できなかった場合を想定して実施した。災害時、放送機器が使用できない場合、全職員はコミュニティホールに集合し、本部から避難指示を仰いでから生徒を避難させることを確認した。

【生徒の感想より】

- ・校内放送の指示で落ち着いて行動できたが、災害時には放送や指示が必ずあるとは限らないので自分で判断して行動しなければならない時もある。このことを意識して、日々の生活を送りたいと思った。
- ・外出先では常に避難経路を確認する習慣を身につけたい。

第1回【参加人数：生徒25名、職員8名】

第2回【参加人数：生徒22名、職員7名】

3 AED救命講習会

6月26日（水）、3、4年生を対象にAED救命講習会を実施した。心肺蘇生法、AEDの使用法などを学び、参加者8名は、普通救急救命講習Ⅰを修了することができた。



「AED救命講習会」心肺蘇生法

4 防災体験学習

10月4日（金）、気仙沼市で防災体験学習を実施した。気仙沼・本吉広域防災センターを訪問し、消防指令センターを見学した後、煙体験、地震体験を行い、消防署職員から東日本大震災の際の気仙沼市の様子や現在の復興の様子を講話していただいた。また、リアスアーク美術館では、被災現場の写真、被災物、地震に関わる歴史資料の展示を見学した。

バス移動中には、石巻市の復興の様子を見ることができ、震災の記憶が風化することがないように、生徒達は、真剣に震災について考えることができたようであった。

【生徒の感想より】

- ・例年、岩手県内での体験学習だったので、宮城県を訪問し、震災当時の話を聞いたり、復興の様子を見たりできたのでとても勉強になった。
- ・煙体験では、煙が上に行くことがわかったので、火災の際は上へ避難するのではなく、下に避難したり、体位も低くして歩いたりすると良いことがわかった。
- ・直接、津波のことに触れたり、いつ起こるか分からない自然災害にどのように備えればいいのか見直すことができたので良い機会になった。

【参加人数：生徒26名、職員6名】



「防災学習体験」気仙沼・本吉広域防災センター

5 ボランティア活動

本校では、釜石市甲子町にある農家を定期的に訪問し、畑地で野菜を育てる農業体験学習を実施している。また畑地に隣接する公園内の草取りなどのボランティア活動を行っている。



「ボランティア活動」公園内の草取り

この公園（こすもす公園）では、東日本大震災後、遊び場を失った子供たちのためにと、公園内に様々な遊具を作って子供たちの「居場所」及び「遊ぶ場所」を提供している。公園内の遊具は震災後ボランティアで釜石を訪れた方々が作ったものである。本校でも復興教育の一環として、「こすもす公園」に関わった人達と交流しながら体験学習を進めている。今年度の主な活動内容は甲子柿作り、馬鈴薯作り、公園内の樹木の剪定作業などである。



「農業体験学習」甲子柿作り

11月からは、公園内にあるクライミングウォール「こすもすウォール」の老朽化に伴い、制作に携わることにした。

釜石市の「自然」をテーマに原画からペンキ塗り作業までを生徒達が担当し、魅力あふれる遊具を完成させることができた。作業中には公園内に来た子供たちと「こすもすウォール」を通じて話がはずみ、地域の子供たちとも交流することができた。



クライミングウォール創作風景

【岩手日報 2019 年 12 月 14 日（土曜日）掲載記事より抜粋】

釜石高校定時制の生徒 9 人は同市甲子町のこすもす公園の遊具リニューアルプロジェクトに励んでいる。クライミングウォールの作画と色塗りを担当し、生徒達が「釜石らしさ」を表現。市内外の幅広い世代に東日本大震災からの復興が進む地域の魅力を発信する。

生徒らは昨年 6 月から、授業の一環として同公園内で農作業を体験。東京都のボランティアらが製作してきた遊具製作を引き継いだ。

佐藤友香さん（4 年）は「協力して作業し、絵が公園に残ることはうれしい」と喜び、岩間絵理奈さん（同）は「復興に歩む姿や釜石のさまざまな魅力を多くの人に理解してほしい」と願う。プロジェクトメンバーの一人深澤鮎美さんは「地域に愛される公園に生徒が関わったという成果物、軌跡が残ることに意味がある」と実感を込める。

Ⅲ 取組の成果と課題

1 成果

- （1） 昨年度より「いわての復興教育スクール（沿岸校）」推進校に指定され、年間を通して学校として復興教育について取り組む体制が整いつつある。

- （2） 今年度は、新たにホースセラピー、AED 救急救命講習、ボランティア活動としてクライミングウォールの制作（地域の子供たちが利用する遊具の制作）を行い、「いきる」「かかわる」に関する体験学習を実施することができた。ボランティア活動においては釜石市の魅力を発信する機会ともなり有意義な活動となった。
- （3） ホースセラピーでは、動植物と直接触れあうことによって緊張を和らげたり、心を癒やしたりする効果があったようで、生徒達は、教室では見られない笑顔を見せたり笑い声を発したりした。動物の命と直接「かかわる」ことによって自分は役に立つ存在だと気づいたり、馬の手入れをすることによってストレスが緩和されたりしたようで学年を越えて交流する機会ともなった。
- （4） 災害時を想定しての避難訓練では、生徒は非常に真面目に取り組んでおり、毎年 2 回実施することの意味も十分に理解できたようであった。本校舎は全日制、定時制、祥雲支援学校で利用しているため避難訓練も今後合同で実施していきたい。
- （5） 防災体験学習では、毎年実施しているため同じ活動にならないよう内容に工夫を加えて実施している。この活動を通して防災について関心を持つ生徒が増え、自然災害に向けて「そなえる」ことの必要性を再確認する機会となっている。

2 課題

- （1） 今年度は、教育的価値「いきる」「かかわる」に関する体験学習を新たに実施することができた。今後の課題としては、避難運営訓練などの災害ボランティア体験活動を通じて安全で安心な社会づくりに貢献できるような人材の育成を目標とする取り組みも取り入れていきたい。
- （2） ホースセラピーについては今後、隔年実施で行いたいと考える。今年度は予算化せず、移動費は私費から支出したが次年度以降から予算化したい。
- （3） 避難訓練は、全日制、定時制、祥雲支援学校で校舎を使用しているため全日制の生徒が避難し終わるまで時間がかかっていた。避難経路に改善が必要である。